

ことばと人間関係

—気の強い女と気の大きい男—

広井 多鶴子

以前、私が大学院生るとき、研究室のかなり上の先輩が後輩たちを家に呼んでご馳走してくれたことがあった。その時何を話したか覚えていないが、一つだけ忘れられないことばがある。それは「僕は気が大きくて気が弱い。だけど妻は気が強くて気が小さい」という先輩のことばである。奥さんもそうなのよねえ、しょうがないわねえといった表情で、その話を聞いていた気がする。私はそのご夫婦をそれほど知っていたわけではなかったけれど、そう言われれば確かにそうかもしれない、うまいことを言うものだと感心してしまった。

それ以来、私は「気が強くて気の小さい女と、気が大きくて気の弱い男」という組み合わせが気になって仕方がなくなった。あのカップルはどうか、このカップルはどうかと、まわりを見渡したりした。すると、いるいる、同じようなカップルが。「気が強くて気の小さい女と、気が大きくて気の弱い男」という組み合わせは、別にその夫婦に限ったことではなかったのだ。否、私の周りにいるほとんどのカップルが同じような組み合わせに見えた。

どうして同じような組み合わせが多いのか。男性は身の周りの細かな人間関係への適応や配慮よりも、社会の中で抜きんでることを価値として育てられる。それに対し、女性の場合は人間関係への繊細な配慮を価値とし、社会に出て身を立てることはあまり重視されない。このような心理学的あるいはジェンダー論的な説明を加えることは可能だろうし、おそらくこうした理解はかなりの程度当たっていると私は思う。

しかし、どうもすっきりしないのである。上の説明は「気の大きな男」と「気の小さな女」には当てはまるだろうけれど、「気の強い女」と「気の弱い男」は、これでは説明できないのではないか。性差心理学的に考えれば、なぜ女は気が強くなるのか、それは、どのように育てられるからなのか、といった問いを立てることになるのかもしれない。だが、それでは答えが見いだせないように思う。おそらく、ほとんどの親は意識的にも無意識的にも、気が強くなるように

女の子を育てているわけではない。女にとっては「優しさ」こそ理想であって、「気の強さ」はあまり望ましくないからだ。にもかかわらず女の子の気が強くなってしまうのは、みんな子育てに失敗しているからなのか。とてもそうは思えない。女の子の気の強さを子育てや社会化の失敗と言うには、気の強い女の子が多すぎる。同様に、気の弱い男の子も山ほどいる。

* * *

こんなことを考えるともなく考えていたとき、ことばに表れる性について分析した本を読んで、私はなるほどそうかと思った（スペンダー『ことばは男が支配する』勁草書一九八七年）。その本では「女はおしゃべりかどうか」が話題の一つとして取り上げられていた。女は男よりおしゃべりだというのは世の「常識」である。それは英語圏でも同じらしい。女の子は男の子より早く話すようになるとか（私の娘はとても遅かったが）、脳の造りから女の方が男より言語能力が優れているとか、だから文学部は女子が圧倒的に多いとか、私たちはこうした「俗説」をしょっちゅう耳にする。この本は、こんな俗説や常識をいたく真面目に取り上げているからおかしい。もっとも、常識を問い直すのが研究の面白さなのだけれど。

ともあれ、果たして女はおしゃべりなのか。この本によると、これまでの研究では、男より女の方がよけいに話すということを裏づける研究は一例もないのに対し、男の方がしゃべるという研究結果はいくつも出ているという。しかも、男は女よりたくさんしゃべるだけでなく、話題を決定し、会話の主導権を握る。他方、女は男の前でことばをつつしみ、聞き役になるか、話題を提供して、男の興味・感心を引き出す役目を担うというのである。要するに、男性は女性よりもおしゃべりなのだ。

にもかかわらず、なぜ女性はおしゃべりと言われ、男性はそう言われないのか。同書はそのからくりを、女のおしゃべりは男との比較によってではなく、沈黙との比較によって計られているからだと言破する。女がおしゃべりだと言われるのは、女が男よりよく話すからなのではない。女は物静かであるべきだとされているから、女が男並みにしゃべると、おしゃべりだとか出しゃばりだと罰せられるというのである。「おしゃべりな女とは、男がしゃべるくらいしゃべる女のこと」（クラマレー）だったのだ。

実際、田嶋陽子がひどくおしゃべりに見えるのは、彼女があろうことか、男がよくするように、人（男）の会話に割り込んで、会話の主導権を奪うからである（ある調査では、割り込みの98%は男性によるものだったという）。また、女たちが屈託なく話しているのを見て、男が「女はよくしゃべるな」とバカにするのも、そこではとても自分が主導権を握れそうにないからだろう。要するに、男が会話の主導権を女に握られ、男としての優位性を脅かされたときに、負け犬の遠吠えのように言うことばが、「女はおしゃべりだ」ということばなのである！

そりゃあ、あまりに身も蓋もないと思われる方は、「おしゃべり」ということばを辞書で引いてみるといい。おしゃべりというのは、単に多弁であるという意味ではない。つまらない話、くだらない話、とりとめのない話、あるいは言っただけでいけない話を、何の思慮もなく漫然と話すというのが、「本当」の意味である。だから、「女はおしゃべりだ」と男が言うのは、女の話はくだらないとバカにするためであって、間違っても女性の多弁さを褒めているわけではない。ついでに、「雄弁」ということばを引いてみると、これは人を引きつけ、説得する力のある巧みで明瞭な話し方をいう。そして、「あの人はとても雄弁だね」というとき、私たちは多くの場合「あの人」を男としてイメージする。何しろ「雄弁」なのだから。女はおしゃべりであっても、雄弁ではないのである。

だが、くどいようだけれど、このことは実際に女はおしゃべりで、男は雄弁だということではない。現実には、おしゃべりな男は女と同じくらいいっぱいいるし、説得力のある話をする雄弁な女も男と同様たくさんいる。にもかかわらず、男は「おしゃべりだ」というレッテル張りを免れ、他方、雄弁な女には「雄弁だ」という評価がなかなか与えられないということだ。つまり、女が実際におしゃべりなのではなくて、多弁な（雄弁な）女を非難することばが「おしゃべり」なのである。そして、「雄弁」は、多弁な（おしゃべりな）男を男らしくて立派だと讃えることによって、女をそうした評価から除外することばなのである。

* * *

とすると、「気の強い女」や「気が大きい男」も同じことかもしれない。私は何だか謎が解けた気がした。学生のころ、ソフィア・ローレンやバーバラ・ス

トライザンドといった、いかにも気の強そうな女優が好きだったわけもわかった気がした。

「気が強い」というのは、岩波の『広辞苑』（第5版）によると、「自分の気持ち主張して曲げない性格」のことだという。これはかなり善意でお上品な解釈である。自分の主張を曲げずに貫くというのは、ある意味では立派なことだ。女よりもむしろ男にこそ求められる資質であるだろう。だからこそ、男が自分の主張をすぐ曲げてしまえば、男にあるまじき「気弱な男」と、さげすまれることになる。だが、にもかかわらず、不思議なことに、私たちは自分の主張を曲げない男を「気の強い男」とは言わない。他方、男に媚びないで、男と同じように自分の意志を通そうとする意志的な女は、「気の強い女」というレッテルを貼られる。それは、一体なぜなのか。

小学館の『日本国語大辞典』は、『広辞苑』より、もっと正直である。「気が強い」というのは、端的に「強情」で「あつかましい」ことだと言う。やっぱりそうなのだ。「気が強い」ということばは、「おしゃべり」と同様、そもそも男が女をバカにするためのことばだったのだ。女が「気が強い」と言われるのは、実際に女が男に比べ、強情であつかましいからではない。女は従順で優しくあらねばならないと考える男が、男の言うことを聞かずに自らの主張を通す女を、強情であつかましいと非難するとき、「キーツエー女だな」と言うのだ。

それに対し「気が大きい」ということばの、なんとポジティブなことか。「気が大きい」というのは、ささいなことは気にせず、心が広くゆったりとしていることらしい。そして、なぜか「気が大きい」のは、男と相場が決まっている。私たちは小さなことを気にしない大らかな女の人を「気が大きい」とは言わない。なぜなら、「気が大きい」というのは、そもそも男の「雄大さ」を讃える男のための形容詞だからである。

ということは、先輩のあのことばは、相当ひどいことばだったのだ。オレは心が広くて男らしいが、妻はオレの言うことを聞かず、強情で困ったもんだというのが言外の意味なのだから。そして、うまいことを言うと思った私も、そんな男性優位の発想に毒されていたことになる。いまや、女は男の言うことに従順に従うべきだなんて露骨に言ったら、「何勘違いしてんの」と嗤われるだろうが、そうした発想はふだん何気なく使うことばそのものの中に潜んでいるので、私たちはなかなか自覚できない。辞書も中立性や客観性を装うから、たとえば「気が強い」を引いても、「多くの場合、女性に対して用いられる女性蔑視

のことば」なんて書かれてはいない。でも、ことばは男と女、親と子、先生と生徒といった人間関係の中で生きている以上、常に現実の力関係を反映しているのだ。

私たちがことばの中に潜んでいる男性優位の発想になかなか気がつかないのは、現実がそうだからと考えてしまうからでもある。女が気が強いと言われるのは、女の方が実際に強情だからと。だが、こうした理解はことばのもつ力を軽視することでもある。もちろん、ことばが現実を反映しないということではない。「気が強い」ということばは、現実の男性優位の男と女の間を良く反映している。だが、それだけではない。女性の方が男性よりも強情であるという〈現実〉のイメージをも、「気が強い」ということばは作り出しているのだ。単に現実がことばを作っているだけではなく、逆に、ことばが〈現実〉という観念を作り出している。それほど力を持つものだからこそ、ことばについて考えることは面白いのである。